おちば

函根にて　久留島武彦

今朝不圖散りゆく木の葉の窓をうつを見て作りたる幼稚園向き唱歌三節御笑草迄お目にかけ候（編者宛書翰の末に）

（一）ハラ〳〵ハラ〳〵木の葉が落ちる
　　おちてはかさなりおちてはつもる
（二）そこにもこゝにもつもつた木の葉
　　また來る春までしづかにねむる
（三）ねむれよ木の葉よまた來る春に
　　若芽となるまで其のまゝ土に

『ポール・ドンビー』（チッケンス）（五）

═══英文學に現はれたる子供（二十四）═══

岡田みつ

それからポールは、語を續けて、舞踏會のある事、姉も招待された事、姉が生徒等に美いと賞められるだらうといふ事、皆が自分に親切にして呉れるから、自分も皆が好きだといふ事を話し、更に

又分折の事や、自分が異樣だといふ事を述べて、ピブチンさんに如何したものだろうか。當世風でなく異樣だといふのは、一體如何いふ意味だろうかと尋ねた。ピブチンさんは面倒だと思つて、一言に其樣な事實はないと言ひ放つてしまつたが、ボールが少しも滿足せず眞實の答を待つてゐるらしくその顏を見るので、ピブチンさんはとう〳〵席を立つて態と窓から外面を見てゐた。

この學校に病人があると呼ばれて來る物靜かな藥劑師が、いつの間にか、ブリンバー夫人と一所に來てボールの臥床の傍に居た。如何にして二人が來たか何時ごろから來てゐたのだか、ボールは少しも知らなかつたが、兎に角二人を見ると、ボールは起き上つて、藥劑師の問に答へ、どうか姉さんに知らせて下さるな。是非姉さんを舞踏會に來させたいのですなど〳〵、元氣よく饒舌つた。それからボールは目を閉ぢて橫になつてゐると、夢だか現だか、遠くでその藥劑師が「體質虛弱で、活力がないのですな。」といつてゐるのが聞こえた。（ボールは何の事だらうと思つた。）「それに、あの少年は十七日に學校の人達に別れるのだと定め込んで居ますから、容體がわるくさへなくば望み通りにしてやつた方が宜う御座いませう。ドンピー君にはもう少し病狀が明瞭になつてから、御通知しませう。え、別に急に○○の心配はありません。」（ボールは○○の處の言葉を聞き漏らした。）あの子は利發ですが風變りの子で」などゝも聞こえた。風變りといふのはどういふのだらう。自分につき纏つてゐるらしいもので、皆の人にすぐ目に付くらしいがと、ボールは胸をどき〳〵させながら獨り怪んでゐた。しかしどうしても解らないし又解ろうと骨も折らないでゐるうちに、ピブチンさんが傍へ來て、（ピブチンさんは藥劑師と一所に出ていつたやうにも思つたが、やつぱり夢であつたかも知れない。）急に藥罐とコップが出て來て、ピブチンさんが藥を注いでくれた。其を飮むだあとで

美味しいジエリーを食べて、其から何でも氣分がよいからと強つて頼んで、ピプチンさんに歸つてもらつたやうであつた。

翌朝は、小使が朝の鐘を鳴らさぬうちに來て、ボールに一日寢てゐるやうにとの命を傳へたのでボールは嬉しがつて床に入つてゐた。昨日のやうにピプチンさんも藥劑師も來て、遠くで相談をしてゐたがそれとも夢に其を見たのかも知れない。やかて、藥劑師は、ブ博士と夫人と三人連で入つて來て、藥劑師が、

「先生、此の生徒さんは、暫らく學課を休ませて上げてよろしいでせう。休暇ももう直きですから」と言ふと。

ブ「宜しいとも。」と博士は答へた。

藥劑師は、身を屈めて、ボールの眼を見たり、頭部に觸れたり、脈をとつたり、心臟を撫でたり、あんまり一心になつて診察するので、ボールは「どうも有りがたう御坐います。」と御禮をいつた。

ブ「この子は少しも苦痛を訴へないです。」と博士がいふと、藥劑師が、

「苦痛を訴へるやうな性質でありませんからな」と答へた。

ブ「今朝は餘程よい方ですか。」

「え。餘程快い方で」と藥劑師は答へた。

其ときいてゐたボールは、藥劑師が博士に答へる答へ振りが、他事と考へながらしてゐるらしく思はれたので、何と思つて居るのだらうと、熟々その顏を眺めたので、藥劑師は、急に氣が付いて、微笑して元氣よい素振りをした。

ボールは終日寢て、うと〳〵夢を見てゐたが、三日目に床を離れて階下へいつて見た。すると廊下の大時計が、どうかしたと見えて、職人が踏臺に登つて、その面をはがして、中の機械をいぢくつて居る。之はボールには大珍事なので、早速階子段の最下の段に腰をかけて、職人の業を見てゐた。踏臺の上の職人は慇懃な男で、ボールを見て「今

日は」と挨拶をした。其を糸口にボールは話を始めた、自分は近來病氣だと答へ、それから時計や鐘の事をいろ〳〵尋ね出して、教會堂の塔に、夜、人が番をしてゐて時刻が來ると鐘を撞くのかとか、人が死んだ時に撞く鐘は如何いふに鳴らすものなのだらうか。結婚式の時のと實際違ふのだか、それとも氣のせいで違つて聞こえるのだらうかなどと問ふた。此の職人は、昔の入相の鐘の話をよく知らぬらしいので、ボールの方からその事の起原を教へてやつた上、昔、アルフレッド王が、蠟燭を燃やして、時を計つたといふが、實際商賣的に考へたら、如何いふものだらうと質問をした。職人は今の世にそのやうな事が始まつたら、時計屋は商賣が立ち行くまいといつた。そんな工合で、ボールは時計がすつかり修繕が濟んで、元の見馴れた體裁になつて「坊ちやんどうです」を繰り返すやうになるまで見物してゐた。職人は道具を片付けて、ボールに挨拶をして出ていつたが、戸口で學校の給仕に、小聲で「風變りだな」といつて居つたのが、ボールの耳に入つた。

皆が氣の毒がるその風變りといふものは、如何いふものだらうとボールは考へた。今は學課もせず用事がないので、彼は尚のことその事を屢々考へた。しかし他にも考へる事が澤山にあつたのでボールは結局終日考へ暮して居るのであつた。第一に、姉さんが舞踏會に來るといふのが一つ、姉さんは、此處の人が自分を可愛がつて呉れてゐるのを見て、きつと喜ぶだらう。姉さんが目のあたり、皆が自分に親切なのを見れば、自分がこの學校に居るのを案じなくなるだらう。休み後に自分が歸村するとしても、姉さんは安心して自分をよこすにちがひないなどゝ思つた。

ボールが又學校へ戻つて來る！　否〳〵、實際ボールは日に何度となく、自分の部室へいつては書物を集めて、細かい品物までを一纏めにして、家へ持つて行く支度をして居た。ボールの心には、

戻つて來る念は少しもなかつた。何をなし何と思ふにつけても、彼の心には歸つて來るといふ氣はなかつた。見馴れ、聞馴れた事々物に接するごとに、これにも御別れ、彼にも御別れといふ風に思つたので、さしてこうボールは、朝から晩まで考へる事ばかり多くあつたのである。

ボールは、ゾーツの事、フヒーダー先生の事、生徒一同の事、ブリンバー博士、ブ夫人、ブ孃の事、父の事、伯母の事を……皆考へた。その上、ボールは一日の中に必ず學校内の各室を訪ふた。校内の諸室へ自由に出入する事を許されてゐるので、敎室へも、博士の書齋へも、ブ夫人、ブ孃の居間へも、犬の處へも尋ねていつた。あらゆる物と仲よく別れやうと思ふので、凡ての物に平等に注意を拂つた。時には、室友の爲に紛失した本を探してやる事もあり、時間が迫つて困つてゐる生徒に字書を引いてやる事もあり、ブ夫人に絹糸をかけてあげたり、ブ孃の机を片付けたり、偶には博士の書齋にまで入つて博士の足許近くよつて、地球儀をそつと廻したりする事もあつた。

もう休暇も間近に迫つてゐるので、生徒等は必死に勉强してゐるのに、ボールは獨り特別待遇をうけて、人々の愛を一人で荷ふてゐた。ブ博士が殊にボールを大切にして、ある食事の時に、ジョンソンといふ生徒が何の氣なしに、ボールを可愛想な子だといつたのを立腹して、食卓から退席を命じた事があつた。ボールは一寸顔を赤めたが、博士の處置を酷だと思つた。何故といふに、その前夜、ブ夫人が「ボールはだん〳〵變になりますよ」といつたのに博士自身が同意したのを、ボールは確に他所ながら聞いたのであるから。ボールは、かう痩せてゐて、體重が輕く、ぢきに疲れて、其處等に仆れたくなるのが、風變りといふものに相違あるまいと鑑定した。

舞踏會の日になつた。しかし食事の時には其夜の催しについては誰も態と何の話も爲なかつた。

たゝしボールは、家の中をぶら〳〵歩いてゐる中に、見馴れぬ腰掛や蠟燭立を見付けたり、客間の外に、綠色の被ひのかゝつてゐる立琴があるのに氣がついた。生徒の室では白チョッキに白ネクタイの人があちにもこちにも出來た。ボールは、氣分が惡くて、長く立つて居られないので、手早く衣服を換へて、客間へ下りていつて見た。すると、博士が禮裝をして、室内を歩いてゐたがその樣子が一二人訪問者があるかもしれぬといふ程の無造作の態度であつた。やがてブ夫人も令孃も美しく裝ふて出て來られた。夫人の裳がぱつと四方に擴がつてゐるので、ボールはその周圍を一廻するのは大運動になると思つた。次に現はれたのがツーツとフヒーダー先生で、二人とも他處から來たかのやうに、手に椅子を持つて居た。取次が博士に、その名を通じると、博士は「これはよく御出下すつた。」といつて頗る歡待する風であつた。ツーツは目も眩いやうに寶石を付けてゐて、それが御得意だと見えて、博士に握手をし、ブ夫人とブ孃に御辭儀をしてから、ボールを小傍へ連れていつて「之はどうだい。何と思ふかね。」と尋ねた。その内に生徒等が皆めかし立てゝ他處行の帽子を手にしてすぐ取次の案内に連れて入つて來たので、愈舞踏の始まりが近くなつた。

ボールは、長椅子の隅に陣取つて、此光景を眺めて居たがフローレンスが來た頃だと席を辷り下りて階下へいつた。彼は二週間程も、姉に逢はずに居たのであるから今フローレンスが、あつさりした舞踏服に、花を手にして入つて來て自分を抱き占めやうと跪いて呉れる時には、一生離れたくないやうの氣がして姉の美しい顏を飽かず眺め入つて居た。

ボ「姉さん、どうしたの。」とボールは姉の目に涙が見えたと思つて尋ねた。

フ「何でもないのよ、何でもないのよ。」とフローレンスが答へた。

ポールは指で姉の頬を撫でると、果して涙であつたので、

ポ「だつて、姉さん！」

「一所に御うちへいつて、私看病して上げるワ。」

とフローレンスがいふ。

ポ「看病するの。」とポールは繰り返して、看病が何の爲とも又何故姉が顔を一寸そむけて、其かう急ににこ〳〵して見せたのだか解らなかつた。

ポ「姉さん。」とフローレンスの髪毛を一本引張りながら、ポールは、

ポ「僕は他と違つてゐますか？　姉さんどう思ひますと。」訊いた。フローレンスは笑つて、弟を可愛いがりながら、

フ「そんな事はない。」といつた。

ポ「でも皆なが左樣いふのですよ。で、僕はそれがどういふのだか知りたいと思つて。」

丁度その時に、玄關に案内を乞ふ音がして、新來の客がありさうなので、此話は途切れてしまつた。

ポールは、誰も長椅子の隅の居心地のよい席を占領するものがないのが變だと思つた。又自分が姉さんの舞踏をするのを見たいと思ふと、誰も自分の前に立ち塞がつて邪魔をするものがないのも變だと思つた。皆が親切で、知らぬお客までが、時々傍へ來て、病氣の見舞をいつてくれたり、疲れはせぬかとか、頭痛がするかとかいつて尋ねて呉れた。ポールは、ほんとに嬉しいと思ひながら、その隅の席により〳〵の枕に身をもたらせて、眺めて居ると。姉さんは一鎖り舞踏がすむときつと傍へ來て呉れた。フローレンスは舞踏するよりも弟の傍に居たいと思つたが、ポールは舞踏して呉れ〳〵と勸めてはやらせてゐた。見物してゐるポールは皆が姉を賞めるし、ことに、姉がその晩の花であつたので、得意さを滿面に現はしてゐた。

舞踏が一寸途切れた時に、お客のうちに一貴婦人が、ポールに「あなた音樂が御好きらしいのです

ね」と云つたので、ボールは「え、大好きです。貴女も御好きならば、僕の姉さんの歌ふのを御聞きなさるといゝ。」といつた。貴婦人が早速是非聞きたいものだと言ひ出した。

フロレンスは、大勢の人の前で唱へと頼まれて始めは吃驚りして、しきりに斷つて居たが、ボールが近くに呼び寄せて「ね、姉さん、唱つて頂戴。僕が頼むのだからね。」といつたので、さうさとピアーの前へいつて歌ひ始めた。それがボールによく見えるやうにと人が皆前を明けてくれたから、ボールはフローレンスの若くて美しくて優しいのを見、その飾らぬ無邪氣の可愛いゝ聲をきいて、胸が一杯になつて顔をそ向けて涙を隱した。而して皆がフローレンスを可愛がるといつたら！　ボールは、豫めさうだろうとは知つてゐたが！「ドンビーの姉さん」が「何ていふ落付きのある優しい少女だらう」「怜悧で藝があつて」などいふ讃辭がボールの耳元に絶えず漂よつて來てボールは言ひしらぬ慰めを得た。

それからボールが暇を告げる時になつた。その時こそ一座色めき渡つて、皆が懇ろにボールに挨拶をした。

ボ「先生さやうなら。」とボールはブリンバー博士に手を出した。

ブ「あゝさやうなら。」と博士は答へた。

ボ「いろ〳〵ありがたう御座いました。どうか皆に犬をよく世話をするやうに仰つて下さい。」と博士の顔を無邪氣に見上げて、ボールがいつた。

その犬といふのは今までボール以外に誰もかまつてやつた事のない獸なのであつたが、博士は、ボールの留守中は、きつとよく世話をさせると約束をした。それで、ボールは、又改めて御禮をいつて暇乞をし、夫からブ夫人とブ孃に向つて、心を籠めた挨拶をした。

ブ孃は、ボールの雙の手をとつて、

「ドンビーさんや。あなたは、私の大好きの生徒

でしたよ。御機嫌よくね。」としみ〴〵いつて呉れたので、ボールは、こんな情のある人とも知らないでゐたと思つた。

「ドンビーが歸るんだ。」「ドンビーが歸るところだよ」といふ囁きが、口々に傳はつて生徒一同ボールとフローレンスとのあとにいて階下へいつた（ブリンバー家の人は勿論の事）こんな光榮は、此校あつて以來、どんな人の退學する時でもなかつた事だと、フヒーダー先生はいつた。召使共迄がドンビーさんの御歸りだと搖めいた。

生徒等はボールに別れを告げるとて、喧しく騷いだ。帽子を振るもの、階子段で押しあふもの、「ドンビー君僕を忘れないでくれたまい。」と怒鳴るものもあつた。ボールは姉に外套は着きせてもらいながら姉に小聲で、

「皆のあの騷ぎがきこえて？　とても忘れられないね。嬉しいではありませんか。姉さんも嬉しいでせう。」といつて、如何にも喜ばしさうな目をしてゐた。

最後の別れにと、ボールは見返つて一同の顏を眺めた。而して今更のやうに、その大勢なのと、その元氣のよいのと、劇場の見物席のやうに顏の上に顏が重なつてゐるのに驚いた。が次に忽ち暗い馬車の中の人となつて、姉にしつかり抱きついてゐた。それから後は、ボールはブリンバー學校の事を思ひ出す時は、いつも此最後の有樣が目に浮ぶのであつた。

その翌日とその以後の事に對してはボールはたゞ混雜した記憶をもつてゐた。何故實家へ歸らないで、毎日〳〵ビプチンさんの宅にゐるのだか、何故床に就いてゐて、姉さんが傍にゐるのだか、室に來てゐるのは御父さんなのだか影法師なのだか解らなかつた。而して醫師が誰かの事をいつて「病人が思ひ定めた時よりも早く他へ移すと、身體は弱つてゐる反對に思ひ込んだ一念は強のですから、却て其が爲に衰弱して果てるでせう。」と言つ

たらしいが果してさうだつたかそれも解らなかつた。又自分が姉に向つて「うちへ連れていつてよ。僕の傍を離れてはいや。」と言つたやうにも思はれた。しかし確に記憶してゐた事は實家へ着いて目馴れた階子段を抱いて連れて行かれた時であつた。その前に何時間か搖れる馬車の中に寐てゐると傍に姉さんが居て、ピプチンさんが對ひ側に居たのも解つてゐた。ボールは自分の臥床を記憶してゐた。伯母さんも居た。スザン(侍女)も居たが一つ何だか別に居た氣がしたので、

ポ「僕、姉さんに用があるの。一寸、姉さんだけに話したい事がある。」

といふと、フローレンスが側に身を屈めて、餘の人は遠くに立つてゐた。

ポ「姉さん、僕が馬車から下された時に、玄關に在したのは、御父さんだつて。」

フ「え。」

ポ「御父さんは僕を見て、泣いて御部屋へ御かへりになつたのではないの。」

フローレンスは首を振つてボールの頰に顔をすりよせた。

ポ「さう、そんならいゝけれど。僕は御父さんが泣いていらつしやるのだと思ひましたよ。他の人に僕がそんな事をいつたなどゝいつてはいけませんよ。」(續く)

○問題を送られ度し

本誌は特に質問欄を設けて多數の質疑に解答を與へ得る力はありません。しかし、實際保育上諸君の最も重要困難なりとす問題を送らるゝならば共に研究する熱心を有して居ります。又多少其の便宜を有して居ります。願はくは、本誌を共同研究の機關として續々問題を送られたし、